

講演者プロフィール・講演内容紹介メッセージ

※7/28現在。敬称略

平野 博紀

文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学入試室 室長

テーマ：大学入学共通テスト

文部科学省



矢幅 清司

文部科学省 初等中等教育局 視学官

テーマ：新学習指導要領

文部科学省



山本 崇雄

横浜創英中学・高等学校 校長補佐、
新渡戸文化学園ラーニングディレクター他

英語

複数の学校、企業と雇用契約を結んでいる二刀流（複業）教師。都立中高一貫教育校を経て、2019年より横浜創英中学高等学校（今年度より校長補佐）、新渡戸文化中学校・高等学校、浜松開誠館中学高等学校の他、日本パブリックリレーションズ学会理事長、GRASグループ、News Picksなどの団体・企業でも活動。Apple Distinguished Educator、LEGO® SERIOUS PLAY® メソッドと教材活用トレーニング終了認定ファシリテータ。「教えない授業」と呼ばれる自律型学習者を育てる授業を実践。教育改革や子どもの自律などをテーマにした講演会、出前授業、執筆活動を精力的に行っている。検定教科書『NEW CROWN ENGLISH SERIES』『My Way』（三省堂）の編集委員を務めるほか、著書に新刊『学びのミライ地図』の描き方（学陽書房）「なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか」（日経BP社）、『「教えない授業」の始め方』（アルク）、『学校に頼らなければ学力は伸びる』（産業能率大学出版部）ほか、監修書に『21マスで基礎が身につく英語ドリル タテ×ヨコ』シリーズ（アルク）がある。

message 令和4年度に高校に入学する生徒から、新しい学習指導要領により学ぶこととなります。したがって「令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テストは、新学習指導要領に対応した試験となります」と大学入試センターのサイトにあります。「また入試が変わるのか」と嘆く声も聞こえてきます。共通テストだけでなく、各大学の入試問題も変化していくでしょう。もはや教師側で全ての大学の入試問題を研究し、全ての対策を授業でしていくことは不可能です。新しい入試に対応した授業、というより、どんな入試の変化にも「自分で」対応できる生徒の育成についてお話していきます。



鶴迫 貴司

東山中学・高等学校 教諭

数学

共通テスト（学習指導要領を含む）から2次試験の対応まで、数学的で考究的な題材を多く採り上げセミナーを実施している。受講された多くの先生方から「授業でそのまま活用できる」といった声が多く定評を頂いている。月刊誌『現代数学（現代数学社）』では、「高校数学の脈絡」をテーマに高校生や先生方を対象とした「学び」のスタンダードを提唱している。大阪府生まれ。教員歴23年。

message 今年度より新学習指導要領が始まりましたが、残り2年は旧課程に沿う形の入試です。今年のセミナーでは、新旧を問わない数学的な「魅力」と育てたい「力」や「評価」について、どのように授業を構築しどのような話をもって授業を展開しているのかを、具体的な資料に基づき話をさせて頂ければと思っています。本年度も精一杯尽力させて頂きたく存じます。

昨年の講演→



土屋 進一

西武学園文理高等学校 教諭

英語

埼玉・西武学園文理中学高等学校教諭。20年目。◆講演実績（全国11都県・今回で51回目の登壇）：①神田外語英語教育公開講座・同基調講演 ②ELEC英語教育研修会 ③英語教育達人セミナー ④カシオ計算機 授業に活かす教材活用セミナー ⑤長野県高等学校 外国語研究会 ⑥啓林館 英語教育セミナー ⑦第8回 アクティブ・ラーニングフォーラム in 福島 ⑧CNN Workbook セミナー（朝日出版社）◆授業動画：Find! アクティブラーナー「教科横断型授業：英語×生物～つながることのUMAMI～」他4本。◆取材・インタビュー：①Find!アクティブラーナー ②学研プラス ③学事出版『月刊高校教育』④朝日出版『CNN Workbook教材活用ガイド』◆示範授業：鳥取県立米子西高等学校（鳥取県「新しい学びの創造事業」[主體的・対話的で深い学び]教員スキルアップ事業）◆掲載原稿（32本）：①大修館書店『英語教育』②啓林館『授業実践記録』③数研出版『CHART NETWORK』④三省堂『授業レポートプラス』⑤東京書籍『英語実践事例』⑥一般財団法人 英語教育協議会 ELEC『ELEC通信』等多数。

message 教科等横断的な視点に立ち、言語活動を通じた読解力や語彙力などの言語能力を育成する3つの具体的指導例（英語×①生物 ②数学 ③古典）を提示します。高等学校「英語コミュニケーション」をベースに教科横断型授業による生徒の学び・気づきを参加者の先生方を生徒に見立て、授業形式でご体験いただきます。また、生徒へのパフォーマンス課題の出し方とその評価についても触れ、実際の生徒のプレゼンテーション動画とループリックに基づいた評価についてもご覧いただけます。最後に、どのように教科横断的な視点を実際の授業に取り入れたらよいかをわかりやすく私なりの5つの視点でまとめさせていただきます。



酒井 淳平

立命館宇治中学校・高等学校 教諭

数学

立命館宇治中学校・高等学校数学科教諭（キャリア教育部長）。立命館宇治中・高で文科省の指定を受けながらキャリア教育部の立ち上げや探究カリキュラムの開発・実践を行い、その知見を数学の授業にも反映させようと試行錯誤しながら様々な取り組みを進めている。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校特別活動』協力者、啓林館（新編）教科書執筆。著書に「高等学校新学習指導要領 数学の授業づくり（明治図書）」。

message 共通テスト、新学習指導要領といろいろな変化をしています。この変化の背景にあるのはどんなことでしょうか。変化の背景をおさえれば、変化はやりたかったことを形にするチャンスになります。高等学校で今求められているのは授業改善に他なりません。セミナーでは、新学習指導要領や共通テストの変化の背景にある考え方を確認したうえで、数学的に考える資質・能力を育てる授業づくりについて考えます。鍵は数学的活動であり、算数・数学の学習過程のイメージ（図）です。オンラインにはなりますが、より良い授業を探究したい先生方との出会いを楽しみにしています。

講演者プロフィール・講演内容紹介メッセージ

前ページからつづき



河川 竜行

渋谷教育学園渋谷中学高等学校 教諭

渋谷教育学園渋谷中学高等学校国語科教諭。桐蔭学園教諭、個人指導塾「河川塾」主宰を経て98年より現職。17年より産業能率大学経営学部兼任講師。学びの主体である生徒・学生が、自分の頭で考え自分の意志で行動することのできる自立した存在になることを目指した「対話型授業」を実践中。授業その他、学校での活動に、コーチングの考え方や手法をとりいれて活用している。教員・保護者向けの研修講師の活動も多数務める。

国語

message 一昨年は「新共通テスト」、昨年は「新学習指導要領」という全体テーマがあり、それらと国語の授業とを関連づけてお話をさせていただきました。その両者は意識しつつも、今年はより授業そのもの、またその土台となる考え方に焦点を絞ってお話ができればと思っています。具体的な授業の例を含むものにはなりますが、生徒たちが主体的・対話的に学べるようになることへの支援に邁ってお話しすることを重視するつもりです。そこで今回は「対話型授業基本編」と名付け、特に対話型授業の経験の少ない方々に向けて、ということを意識してお話しできればと思っています。



田中 義靖

東京都立多摩科学技術高等学校 指導教諭

前任校から連続して10年間ほどSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の担当として高校生の探究活動の質的な向上と国際化に関わってきた。また、全国規模の化学教員のネットワークの運営や実験授業の普及に努めてきた。6月には丸善より『575化学実験 実践ガイド』という書籍が出ている。さらに、思考力を養う授業の在り方を検討し、各誌で紹介されてきた。それらの活動が評価され、日本化学会の科学教育有功賞や日本理化学協会の協会賞などを受賞してきている。

化学

message まず、共通テストに見られる思考力を問う問題や学習指導要領に書かれている実験結果から生徒自らが法則などを見出す授業について解説します。その後、令和7年度以降の入試に向けた授業の組み立て方について「化学基礎」と「化学」の授業での実践例をご紹介します。通常授業と演習問題を扱う授業と実験授業における3観点の評価も踏まえた実践を具体的に提示します。視聴された先生方が翌日に実践できるものを提供したいと考えています。



山本 智也

筑波大学附属駒場中・高等学校 教諭

新潟県佐渡島生まれ。新潟明訓中学校・高等学校教諭を経て現職。「公共」教科書執筆者（東京書籍）。学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者（文部科学省）。評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究協力者（国立教育政策研究所）。現任校では、中学校社会科と高校公民科の各科目を担当。「大切だ」ではなく「面白い」で引っ張る授業づくりをモットーにしている。

公共

message 様々な学習コンテンツがネットで手軽に手に入るいま、学校の授業の意義は、議論を通じた思考力の育成にあるのではないのでしょうか。知識を具体的な文脈の中で活用し、本当に自分のものにする授業。自分の頭で考える面白さを体感できる授業。こうした授業づくりこそ、新課程時代の大学入試への最も有効な備えではないかと思っています。本セミナーでは、「公共」の本旨と共通テストの動向をふまえて、普段使いの授業をどのように工夫できるか、具体例をもとに考えていきます。実践に役立つヒントをつかみやすいように、①教材研究、②問いと学習活動のデザイン、③評価など、授業づくりを要素に分解しながら進めます。

地歴・公民では他に、[歴史総合]の授業実践を予定!



齋藤 祐

中央大学附属中学校・高等学校 教諭

東京学芸大学卒業。2005年より中央大学杉並高等学校教諭。2018年4月より中央大学附属中学校・高等学校に期限付きで異動中。三省堂高等学校国語教科書編集委員。NHKラジオ高校講座「言語文化」・Eテレ「国語表現」監修講師。都留文科大学非常勤講師。

国語

message いよいよ始まった「現代の国語」をふまえて、実際の授業内容をダイジェスト形式でお送りします。使用する教材は、押井守「ひとまず、信じない」と、森達也「真実はひとつじゃない」。どちらも、令和4年度版の「現代の国語」教科書教材です。実践の振り返りを通じて、ご覧になる先生方の、明日の授業へのヒントとなれば幸いです。



昨年の講演→



糟谷 武志

武蔵野大学中学校・高等学校 教諭

東京学芸大学教育学部、同大学院教育学研究科社会科教育専攻修了。2020年より武蔵野大学中学校・高等学校教諭。スウェーデンへの留学経験、31ヵ国への旅行経験を活かしながら、「世界への解像度を上げる地理」をモットーに、日々授業力向上に努める。

地理総合

message 令和7年度大学入学共通テストから、地理歴史科では出題科目の一つに『地理総合、地理探究』が、および公民科と組み合わせられた科目として『地理総合、歴史総合、公共』が設定されます。これにより、今年度から高等学校で始まった地理総合も受験科目として多くの生徒が利用することになります。今回のセミナーでは、「共通テストを念頭に置いた地理総合の授業の取り組み」をテーマとして、授業実践事例を通して、GISの活用、主体的・対話的な学習活動、新課程における評価方法などを紹介させていただきます。ご覧になる先生方にとって少しでも意義のある内容になれば幸いです。

探究

渡部 敦 (発表者)

宮城県仙台第三高等学校
教諭、SSH-授業づくり研究センター長



地理歴史科(世界史)。SSH事業とともに授業プログラムの開発や実践を学校全体で取り組んでおり、探究活動がカリキュラムの中心となり、探究的な学びの手法があらゆる教科に浸透できるよう研究をすすめている。また自身の授業にもPBLを取り入れ、生徒の思考力を伸ばす授業を目指し日々奮闘している。

message 学校を取り巻く環境は大きく変化し、これまでと比べて社会とのつながりが重要視されるようになりました。生徒の興味関心は、学校だけにとどまりませんので、社会との連携は生徒の資質能力を伸ばすうえで、絶好の機会といえます。ただ、探究活動を好き勝手にやらせても思うような成果につながりません。教科や教科横断的な学びが土台に根付いているからこそ深まった探究活動が実践できるのだと思います。カリキュラムマネジメントの観点からも生徒の資質能力を育成し、かつ新学習指導要領に対応した大学入試を突破する力につなげるにはどうすればよいか、お互いに情報共有できる機会になればと思います。

村田 淳 (共同研究者)

宮城県仙台第三高等学校 教諭、SSH担当



理科(物理)。2019年4月より現職。理数科部ではSSH第Ⅲ期申請を担当し、R4年度採択。探究活動を軸にしたカリキュラム開発と、探究実践の場として尚志ヶ丘フィールドの開発を進めている。教職歴16年。

message 仙台三高の探究活動の指導では、テーマ設定や調べ方・進め方、発表の仕方、評価、外部との繋がりなど、その都度試行錯誤しながら取り組んでいます。中でも、テーマ設定では、それぞれの生徒の興味関心が反映されるため、多様なテーマに合わせた指導の難しさを痛感しています。今回のセミナーでは、これまでに取り組んできた通常授業でのPBL(小さな課題設定・解決)や、知の博物館(探究活動のデータベース)の整備・活用のお取組について紹介させていただきます。生徒が主体的に探究活動を進められる体制づくりの一助となればと思います。

英語(東進)

安河内 哲也

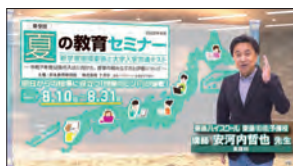
東進ハイスクール・東進衛星予備校 講師



中学生から社会人までの英語力を劇的に向上させることで定評がある。著作の累計は350万部超。検定教科書「My Way論理表現」編集主幹。各種教育機関や、試験機関において、講演や監修等の業務を行っている。また、文部科学省や東京都の英語教育関連審議会の委員も歴任。i情報経営イノベーション専門職大学客員教授・客員研究員。米政府認定NPO 英語評価学会理事。TOEIC試験4技能(LRSW合計)1390点満点。

message この1年間も、顧問を務める学校や自治体、各県の教育委員会や東進のネットワークを通じて、活動的な英語授業を促進するための研修をたくさんしてきました。その中で初めて学校現場に放り込まれた新任の若者達や、急に活動型授業を始めることになった先生方をたくさんお手伝いしてきました。具体的にどのような問題が発生したのか?そしてそれをどのように解決してきたのか?具体的に実際の現場の動画をうけて、活動型授業のポイントを伝えます。2学期からの授業に向かって、元氣とやる気がチャージできる内容にしたいと思います。ぜひふるってご参加ください。

講演内容紹介映像ができました!



英語の
講演紹介
はこちら→



探究

木村 健太

広尾学園中学校・高等学校
医進・サイエンスコース 統括長

Coming
Soon



中野 由章

工学院大学附属中学校・高等学校 校長

1990年芝浦工業大学大学院工学研究科電気工学専攻修了。技術士(総合技術監理・情報工学)。情報処理学会初等中等教育委員会委員長、情報オリンピック日本委員会理事。日本IBM大和研究所、三重県立高等学校、千里金蘭大学、大阪電気通信大学、神戸市立科学技術高等学校を経て、2021年より工学院大学附属中学校・高等学校校長兼工学院大学教育支援機構教育開発センター特任教授。学校法人工学院大学理事。2015年情報処理学会山下記念研究賞、2016年情報処理学会学会活動貢献賞、2017年科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞、2018年情報処理学会大会優秀賞。

message いよいよ2022年度入学生から「情報I」が始まりました。今までの「社会と情報」や「情報の科学」に比べて、扱う内容が格段に増えて高度化したと言われてます。また、国立大学は大学入学共通テストで「情報」を原則として課すことも発表されています。一方、学校の進路指導や情報科の教員などがこの変化に対応できるのか不安視する声も聞かれます。そこで、そもそも「情報」とはどういう教科なのか、GIGAスクール構想や高大接続も意識してどのような教育を行えばよいのか、教員免許更新講習に変わる新しい教員研修なども見据えてどのように指導力を向上すればよいのかなど、さまざまな観点からお話させていただきます。

推薦入試(東進)

正司 光範

東進ハイスクール・東進衛星予備校・早稲田塾 講師



推薦入試合格者日本一の予備校「早稲田塾」(東進ネットワーク)で、多数の合格者を輩出してきたスペシャリスト。学問的センスを高め、科学的思考力を身につけるアカデミックな方法論により、推薦入試(総合型・学校推薦型選抜)から小論文・総合問題まで、新しい入試を突破する力を養成する。学生時代には、外務省プレゼンカップで最優秀の外務大臣賞、学部長賞を二年連続受賞。大学院博士課程で最も優秀な学生に与えられる「ヤングリーダー奨学金」対象に選抜。その他職歴として、大阪大学や慶應義塾大学における講師(国際関係論)、内閣府の研究会で研究員など。NHK・Eテレ『ニュー試一世界の試験で未来が見える』出演。

message 今回の講演では、推薦入試を取り巻く現状と、推薦入試でどのように指導すべきかについてお話しさせていただきます。推薦入試には誤解が多く、「学力軽視」などとの批判も多く聞かれます。しかし、それは実態とはかけ離れています。本来、推薦入試は、総合的な学習(探究)などと同様、高大接続改革の一環として位置づけられるものです。各試験では、受験生が主体的な学びを実践できるか、その大学・学部で学ぶ上で必要な高い学力を有しているかが鋭く問われます。小手先のテクニックで、見栄えの良い書類を作る。面接でのやり過ごし方を学ぶ。そんなことが本来の指導ではないはず。法学部であれば、法律学や政治学。文学部であれば、哲学や史学、文学など。自らの知識や技能を活用して、課題を発見し、解決に向けて探究する。こうした新しい学びを実践できるかが合格のカギになります。そんな推薦入試の現場についてご紹介できれば、幸いです。

講演内容紹介映像ができました!



推薦入試
の講演紹介
はこちら→

